

古文ドリル：「の」の識別 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） 著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「の」の正体（4用法）

古文の格助詞「の」は、受験生がもっとも識別に迷う助詞のひとつです。おもな用法は **4種類** あり、それぞれ意味がまったく異なります（このほか「～のように」と訳す比喻〔連用修飾格〕の用法もあります。例：あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を）。

用法	言い換え	見分けポイント	例
① 連体修飾格	(AのB)	直後が 体言 、修飾関係	春 の 花
② 主格	が	下の 用言（述語）の主語 になる（連体形で下の体言に続く形や「～ば」「～て」の句の中に多い）	風 の 吹く夜
③ 同格	で （～であって）	前後が 同じもの を指す・後ろの句が 連体形 で終わり、その下に「の」の前と同じ体言を補える	白き鳥 の 、嘴と脚と赤き
④ 準体格	～のもの・～のこと	「の」の下に 体言を補える （〈体言＋の〉の形で、すぐ後には・も・を・に・なり などが続く）	唐 の はさらなり（＝唐の〔なでしこ〕は）

識別の鉄則（置き換えテスト）

- 「**が**」に置き換えて自然 → **主格**（「の」の前の語が、下の用言〔述語〕の主語になる）
- 「**で**」に置き換えて自然＋前後が同一物 → **同格**（後ろの句が連体形で終わり、その下に前と同じ体言が省略されている）
- 「**の**」の下に**体言を補える**（「～のもの」「～のこと」と訳せる） → **準体格**（〈体言＋の〉の形。すぐ後には・も・を・に・なり などが続く）
- どれにも当てはまらない（直後が体言の修飾） → **連体修飾格**

主格・同格・準体格の3つを先に確認し、残ったものを連体修飾格と判断するのが確実です。

🎯 解き方のコツ（試験本番で3秒）

コツ① 「の」の直後の語を見る

- 直後が**体言（名詞）** → まず **連体修飾格**（春の花／都の月）

- 直後が**用言**（動詞・形容詞など）→ **主格** か **同格** を疑う
- 直後が**助詞**か**断定的「なり」**（は・も・を・に・なり など）→ **準体格**（下に体言を補う。の＝～のもの・～のこと。「～のごとし」「～のやうなり」の「の」は除く）

コッ② 後ろが連体形の時、「が」で訳して主語になるか

- 「風の吹く」＝「風**が**吹く」と自然 → **主格**
- 「白き鳥の…赤き」＝前の「鳥」と後ろが**同じ鳥** → **同格**（「で」で訳す）
- 見分け：連体形の下に「の」の**前と同じ体言**を補えるなら同格。連体形が**別の体言を修飾**している・下に「こと」を補う・文がそこで終わる（連体止め）なら、ふつうは主格（ものを並べ挙げる文では同格と読むこともある）。

コッ③ 「の」の前後が同じものか別のものか

- 同じもの（白き鳥＝嘴脚赤き鳥）→ **同格**
- 別のもの（風／夜）→ **主格** か **連体修飾格**

よくある引っかけ

- 「の」の直後が動詞でも、**後ろの体言を別に修飾**していれば主格（風の吹く**夜**）。
- 「の」の前後が同一物なら、直後が連体形でも**同格**（清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たる〔僧〕が来て）。直後が体言でも、後ろが連体形で終わり前と同じ体言を補えるなら**同格**（白き鳥の嘴と脚と赤き〔鳥〕）。
- 「唐**の**は」のように「の」の下に体言を補えるなら**準体格**（連体修飾格と混同しない）。「白きのを着る」のような〈連体形＋の〉は今の言い方で、古文では「白きを着る」と連体形がそのまま体言の働きをする（準体法）。

採点表

各セッションごとに自己採点し、最後に合計を記録してください。

- 基礎（Q1～Q20）： ／20
- 標準（Q21～Q50）： ／30
- 応用（Q51～Q80）： ／30
- 入試レベル（Q81～Q100）： ／20
- 合計： ／100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

4用法を純粋に識別する基本問題。各用法5問ずつ。

Q1. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春の花。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「花」。「春が花」「春で花」とは言えず、「春の花」と修飾関係が成り立つ。直後が名詞ならまず連体修飾格。

Q2. 次の傍線部「の」を識別せよ。

山の端。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「端（は）」。「山の端（やまのは）」は山ぎわのこと。前の語が後ろの名詞を修飾する典型。

Q3. 次の傍線部「の」を識別せよ。

君の声。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「声」。「君が声」とも言えそうだが、後ろが用言でなく体言なので主格ではなく連体修飾格。「あなたの声」。

Q4. 次の傍線部「の」を識別せよ。

都の月。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「月」。「都の月」で修飾関係。が・で・もの のどれにも置き換わらない。

Q5. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人の心。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「心」。「人の心」で修飾関係。直後が名詞なので連体修飾格。

Q6. 次の傍線部「の」を識別せよ。

風の吹く夜。

答え：主格 解説：「風が吹く夜」と「が」に置き換えて自然。直後「吹く」は連体形で、その先の体言「夜」を修飾する連体節。「風」はその節の主語。

Q7. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の出づるころ。

答え：主格 解説：「月が出づるころ」と訳せる。直後「出づる」は連体形、先の体言「ころ」を修飾。「月」が主語なので主格。

Q8. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雪の降る朝。

答え：主格 解説：「雪が降る朝」と自然。「降る」は連体形で「朝」を修飾。「雪」が主語の主格。

Q9. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鳥の鳴く声。

答え：主格 解説：「鳥が鳴く声」。「鳴く」は連体形で「声」を修飾。「鳥」が主語の主格。

Q10. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の散る春。

答え：主格 解説：「花が散る春」と訳せる。「散る」は連体形で「春」を修飾。「花」が主語の主格。

Q11. 次の傍線部「の」を識別せよ。

赤き花の、いと大きなるを折りつ。

答え：同格 解説：「赤い花で、とても大きい（花）を折った」。「大きなる」の下に前と同じ「花」を補って「いと大きなる（花）を」と読める。前後が同じ花を指し、「で」に置き換えられるので同格。

Q12. 次の傍線部「の」を識別せよ。

をかしげなる児の、二つばかりなるを抱きて来たり。

答え：同格 **解説：**「かわいらしい子で、二歳ほどの（子）を抱いてやって来た」。「二つばかりなる」の下に「児」を補える。前後とも同じ「児」を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q13. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て。(更級日記)

答え：同格 **解説：**「たいそうござっぱりとした僧で、黄色い地の袈裟を着ている（僧）がやって来て」。「着たる」の下に「僧」を補える。前後が同じ僧を指し、「で」に置き換えられる同格。（「黄なる地の袈裟」の「の」は連体修飾格。）

Q14. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きやかなる男の、太刀帯きたるが、門に立てり。

答え：同格 **解説：**「大柄な男で、太刀を腰につけている（男）が、門に立っている」。「帯きたる」の下に「男」を補える。前の「男」と後ろが同一物で、「で」に置き換えられる同格。

Q15. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ほそやかなる女の、髪長きが、出で来たり。

答え：同格 **解説：**「ほっそりとした女で、髪の長い（女）が、出てきた」。「髪長き」の下に「女」を補える。前後とも同じ女を指す同格。（出て来たのは女なので、「女の髪」とつないで連体修飾格と読むのは誤り。）

Q16. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この扇は、かの人_のなり。

答え：準体格 **解説：**「この扇は、あの人（の）の（扇）である」。「の」の下に、前に出た「扇」を補って「かの人（の）なり」と読める。「～のもの」と訳し、体言の代わりをする準体格。直後の「なり」は断定の助動詞。

Q17. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが宿の梅は、隣**の**よりも早く咲きにけり。

答え：準体格 **解説：**直後が格助詞「より」。下に「梅」を補って「隣の（梅）よりも」と読める。「私の家の梅は、隣の（梅）よりも早く咲いたことだ」。準体格。（「宿の梅」の「の」は連体修飾格。）

Q18. 次の傍線部「の」を識別せよ。

空の月も、池**の**も、ともに澄めり。

答え：準体格 **解説：**直後が係助詞「も」。下に「月」を補って「池の（月）も」と読める。「空の月も、池の（月＝池に映る月）も、どちらも澄んでいる」。準体格。（「空の月」の「の」は連体修飾格。）

Q19. 次の傍線部「の」を識別せよ。

草の花はなでしこ。唐**の**はさらなり、大和のもいとめでたし。（枕草子）

答え：準体格 **解説：**直後が係助詞「は」。下に前の「なでしこ」を補って「唐の（なでしこ）は言うまでもない」と読める。「～のもの」と訳す準体格。（後ろの「大和の」も同じ準体格。「草の花」の「の」は連体修飾格。）

Q20. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが筆は折れにければ、人**の**を借りて書く。

答え：準体格 **解説：**直後が格助詞「を」。下に「筆」を補って「人の（筆）を」と読める。「自分の筆は折れてしまったので、人の（筆）を借りて書く」。準体格。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

実際の古文に近い例文で、4用法を見分ける。置き換えテストを順に試そう。

Q21. 次の傍線部「の」を識別せよ。

秋**の**夕暮れ。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「夕暮れ」。「秋の夕暮れ」で修飾関係。連体修飾格。

Q22. 次の傍線部「の」を識別せよ。

水の流るる音。

答え：主格 解説：「水が流るる音」。「流るる」は連体形で「音」を修飾。「水」が主語の主格。

Q23. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雨の降るを見る。

答え：主格 解説：「雨が降るのを見る」。「降る」の主語が「雨」で、「が」に置換できる主格。

Q24. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。(徒然草)

答え：同格 解説：「大きな柑子（みかん）の木で、枝もしなうほど（実が）なっている（木）が、周りを嚴重に囲ってあったのには、少し興ざめして、この木がなかったらよかったのと思われた」。「なりたる」の下に「木」を補える。前の「木」と後ろが同一物で、「で」に置き換えられる同格。（「柑子の木」の「の」は連体修飾格。）

Q25. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この笛の音は、父のに似たり。

答え：準体格 解説：直後が格助詞「に」。下に「笛の音」を補って「父の（笛の音）に似ている」と読める。準体格。（「笛の音」の「の」は連体修飾格。）

Q26. 次の傍線部「の」を識別せよ。

旅人の行く道。

答え：主格 解説：「旅人が行く道」と「が」に置き換えて自然。「行く」は連体形で「道」を修飾。「旅人」が主語の主格。

Q27. 次の傍線部「の」を識別せよ。

庭の桜。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「桜」。「庭の桜」で修飾関係。連体修飾格。

Q28. 次の傍線部「の」を識別せよ。

星の光る空。

答え：主格 解説：「星が光る空」。「光る」は連体形で「空」を修飾。「星」が主語の主格。

Q29. 次の傍線部「の」を識別せよ。

やむごとなき人の、おはしければ、人々かしこまりぬ。

答え：主格 解説：「高貴な人がいらっしゃったので、人々はかしこまった」。「おはし（おはす）」の主語が「人」で、「が」に置き換えられる主格。※「おはしければ」は連体形ではないので、下に「人」を補う同格にはならない。

Q30. 次の傍線部「の」を識別せよ。

にほひやかなる花の、露をおびたるを、文に付けてやる。

答え：同格 解説：「つややかに美しい花で、露を帯びている（花）を、手紙に付けて送る」。「おびたる」の下に「花」を補える。前後が同じ花を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q31. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の都。（竹取物語）

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「都」。「月の都」で月にある都の意。修飾関係なので連体修飾格。

Q32. 次の傍線部「の」を識別せよ。

これは春の歌、かれは秋のなり。

答え：準体格 解説：直後が断定の助動詞「なり」。下に「歌」を補って「あれは秋の（歌）である」と読める。準体格。（「春の歌」の「の」は連体修飾格。）

Q33. 次の傍線部「の」を識別せよ。

川の音聞こゆ。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「音」。「川の音（が）聞こゆ」で「川の音」は修飾関係。直後が名詞なので連体修飾格。

Q34. 次の傍線部「の」を識別せよ。

我が身一つの秋にはあらねど。（古今集）

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「秋」。「我が身一つの秋」で「私一人だけの秋」と修飾関係。連体修飾格。

Q35. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あまたの文の中より、姫君のを取り出づ。

答え：準体格 解説：直後が格助詞「を」。下に「文」を補って「姫君の（手紙）を」と読める。「たくさんの手紙の中から、姫君の（手紙）を取り出す」。準体格。（「あまたの文」「文の中」の「の」は連体修飾格。）

Q36. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鶯の鳴く。

答え：主格 解説：「鶯が鳴く（ことよ）」。「鳴く」の主語が「鶯」で、「が」に置き換えて自然なので主格。文末の「鳴く」は、連体形で言い切った形（連体止め）と見る。

Q37. 次の傍線部「の」を識別せよ。

高き屋の上。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「上（うへ）」。「高い御殿の上」で修飾関係。連体修飾格。

Q38. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと白き犬**の**、いみじう大きなるが、走り来たり。

答え：同格 **解説：**「たいそう白い犬で、とても大きい（犬）が、走ってきた」。「大きなる」の下に「犬」を補える。前後が同じ犬を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q39. 次の傍線部「の」を識別せよ。

海**の**色。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「色」。「海の色」で修飾関係。連体修飾格。

Q40. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雲**の**みる山。

答え：主格 **解説：**「雲がみる（＝かかっている）山」。「みる」は連体形で「山」を修飾。「雲」が主語の主格。

Q41. 次の傍線部「の」を識別せよ。

紅**の**衣。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「衣」。「紅の衣（くれなゐのころも）」で修飾関係。連体修飾格。

Q42. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心ざし深かりける人**の**、夜離れせず通ふありけり。

答え：同格 **解説：**「愛情の深かった人で、夜離れ（男が女のもとへ通わなくなること）もせずに通ってくる（人）がいた」。「通ふ」の下に「人」を補って「通ふ（人）ありけり」と読める。前後とも同じ人を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q43. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人々の車はみな帰りぬるに、大将**の**のみ残れり。

答え：準体格 解説：直後が副助詞「のみ」。下に「車」を補って「大将の（車）だけが残っている」と読める。体言の代わりをして主語になる準体格。（「人々の車」の「の」は連体修飾格。）

Q44. 次の傍線部「の」を識別せよ。

谷の水。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「水」。「谷の水」で修飾関係。連体修飾格。

Q45. 次の傍線部「の」を識別せよ。

子の泣くを見て。

答え：主格 解説：「子が泣くのを見て」。「泣く」は連体形、「子」がその主語。「が」に置換でき主格。

Q46. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いみじう白き扇の、いと多く散りたるを、取り集む。

答え：同格 解説：「たいそう白い扇で、とてもたくさん散らばっている（扇）を、拾い集める」。「散りたる」の下に「扇」を補える。前後が同じ扇を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q47. 次の傍線部「の」を識別せよ。

旅の空。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「空」。「旅の空」で修飾関係。連体修飾格。

Q48. 次の傍線部「の」を識別せよ。

浪の寄する磯。

答え：主格 解説：「波が寄せる磯」。「寄する」は連体形で「磯」を修飾。「浪」が主語の主格。

Q49. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この二つの琴は、大納言のと中納言のとなり。

答え：いずれも準体格 **解説：**それぞれ直後が格助詞「と」。下に「琴」を補って「大納言の（琴）と中納言の（琴）とである」と読める。どちらも体言の代わりをする準体格。（「二つの琴」の「の」は連体修飾格。）

Q50. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の香。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「香（か）」。「花の香」で修飾関係。連体修飾格。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

紛らわしいもの、同一文中に複数の「の」が出るもの、有名作品の一節で実戦的に。

Q51. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春の夜**の**夢ばかりなる手枕に。（千載集）

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「夢」。「春の夜の夢」と修飾を重ねる。「が・で・もの」に置換できず連体修飾格。

Q52. 次の傍線部「の」を識別せよ。

世の中にたえて桜**の**なかりせば。（古今集・在原業平）

答え：主格 **解説：**「世の中に桜が全く無かったら」。「桜が」と訳せる。「なかり」の主語が「桜」。主格。

Q53. 次の傍線部「の」を識別せよ。

宮**の**内。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「内（うち）」。「宮の内（御殿の中）」で修飾関係。連体修飾格。

Q54. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鳩の海や月**の**光のうつろへば。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「光」。「月の光」で修飾関係。連体修飾格。(同じ歌の後ろの「光の」は主格になりうるが、傍線部は「月の光」の「の」。)

Q55. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月の光**の**うつろへば。

答え：主格 **解説：**傍線部は「光の」。「月の光が(湖面に)映ると」と「が」に置き換えられ、「うつろへ(うつろふ)」の主語が「光」なので主格。「うつろへば」は已然形+「ば」で「～と・～の」で。(前の「月の」は連体修飾格。)

Q56. 次の傍線部「の」を識別せよ。

親**の**思ふ子。

答え：主格 **解説：**「親が(いとしく)思う子」と「が」に置き換えられる。「思ふ」は連体形で「子」を修飾。「親」が主語の主格。

Q57. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雀の子**の**、ねず鳴きするにをどり来る。(枕草子)

答え：主格 **解説：**「雀の子が、(人が)ねず鳴き(ねずみの鳴きまね)をすると、踊るようにやって来る」。「をどり来る」の主語が「雀の子」で、「が」に置き換えられる主格。「ねず鳴き」は、雀を呼ぶために人がするもの。(「雀の子」の「の」は連体修飾格。)

Q58. 次の傍線部「の」を識別せよ。

塵**の**つもりて山となる。

答え：主格 **解説：**「塵が積もって山となる」。「つもり」の主語が「塵」。「が」に置換でき主格。

Q59. 次の傍線部「の」を識別せよ。

春日野**の**若菜。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「若菜」。「春日野の若菜」で場所を表す修飾。連体修飾格。

Q60. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと幼き人の、文読みたるを呼び寄せて、物問ふ。

答え：同格 解説：「たいそう若い人で、書物を読んでいる（人）を呼び寄せて、ものを尋ねる」。「読みたる」の下に「人」を補える。前後が同じ人を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q61. 次の傍線部「の」を識別せよ。

わが矢は外れぬれど、兄のは鳥に当たりぬ。

答え：準体格 解説：直後が係助詞「は」。下に「矢」を補って「兄の（矢）は鳥に当たった」と読める。準体格。

Q62. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鏡の影。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「影（かげ＝姿・光）」。「鏡の影（鏡に映る姿）」で修飾関係。連体修飾格。

Q63. 次の傍線部「の」を識別せよ。

昨日の雨よりも、今日のこそいみじけれ。

答え：準体格 解説：直後が係助詞「こそ」。下に「雨」を補って「今日の（雨）こそ」と読める。「昨日の雨よりも、今日の（雨）のほうがひどい」。準体格。「こそ」の結びで「いみじけれ」は已然形。（「昨日の雨」の「の」は連体修飾格。）

Q64. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鶴の群れ。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「群れ」。「鶴の群れ」で修飾関係。連体修飾格。

Q65. 次の傍線部「の」を識別せよ。

笛の音の、いとをかしげに聞こゆる。

答え：(傍線部＝「音の」) 主格 **解説：**傍線部は「音の」。「(笛の) 音が、たいそう趣深く聞こえる (ことよ)」。「聞こゆる」の主語が「音」で、「が」に置き換えられる主格。文末の「聞こゆる」は連体形で言い切った形(連体止め)で、音が聞こえることを述べている。「聞こゆる」の下に「音」を補って読む形ではないので、同格ではない。(前の「笛の」は連体修飾格。)

Q66. 次の傍線部「の」を識別せよ。

雪の降りたるは。

答え：主格 **解説：**「雪が降っているのは」。「降り」の主語が「雪」。「が」に置換でき主格。直後「降りたる」は連体形で、準体法の「は」に続く。

Q67. 次の傍線部「の」を識別せよ。

唐土(もろこし)の人。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「人」。「唐土の人(中国の人)」で修飾関係。連体修飾格。

Q68. 次の傍線部「の」を識別せよ。

この歌は、人のをまねびたるなり。

答え：準体格 **解説：**直後が格助詞「を」。下に「歌」を補って「人の(歌)をまねたものである」と読める。準体格。

Q69. 次の傍線部「の」を識別せよ。

男の、女のもとへ行きける夜、雨いたく降りけり。

答え：主格 **解説：**傍線部「男の」。「男が、女のところへ行った夜、雨がひどく降った」。「行きける」は連体形で「夜」を修飾し、その主語が「男」。「が」に置き換えられる主格。(後ろの「女の」は連体修飾格。)

Q70. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと小さき鳥**の**、梢にゐたるを捕らへむとす。

答え：同格 **解説：**「たいそう小さい鳥で、梢にとまっている（鳥）を捕まえようとする」。「ゐたる」の下に「鳥」を補える。前後が同じ鳥を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q71. 次の傍線部「の」を識別せよ。

飛ぶ鳥**の**声。

答え：連体修飾格 **解説：**傍線部「鳥の」。直後が体言「声」。「鳥の声」で修飾関係。連体修飾格。（「飛ぶ」は「鳥」を修飾する別の連体修飾。）

Q72. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ほかの花はみな散りぬ。この木**の**ぞ、なほ咲き残れる。

答え：準体格 **解説：**直後が係助詞「ぞ」。下に「花」を補って「この木の（花）が、まだ咲き残っている」と読める。体言の代わりをして主語になる準体格。「ぞ」の結びで「残れる」は連体形。（「ほかの花」の「の」は連体修飾格。）

Q73. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心あてに折らばや折らむ初霜**の**置きまどはせる白菊**の**花。（古今集・凡河内躬恒）

答え：（前「初霜の」）主格／（後「白菊の」）連体修飾格 **解説：**「当て推量で、折るなら折ってみようか。初霜が置いて（白さで）見分けにくくしている白菊の花を」。前の「の」は「置きまどはせる（置きまどはす）」の主語を示す主格（「が」に置き換えられる。「置きまどはせる」は連体形で下の「白菊の花」を修飾）。後ろの「の」は直後の体言「花」を修飾する連体修飾格。一文に複数の「の」が出る典型。

Q74. 次の傍線部「の」を識別せよ。

滝**の**音は絶えて久しくなりぬれど。（千載集）

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「音」。「滝の音」で修飾関係。連体修飾格。

Q75. 次の傍線部「の」を識別せよ。

花の色は移りにけりな。(古今集・小野小町)

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「色」。「花の色」で修飾関係。連体修飾格。

Q76. 次の傍線部「の」を識別せよ。

うつくしきもの。瓜にかきたる児の顔。(枕草子)

答え：連体修飾格 解説：傍線部「児の」。直後が体言「顔」。「児の顔（幼児の顔）」で修飾関係。連体修飾格。

Q77. 次の傍線部「の」を識別せよ。

えならぬ香のするに、驚きて見出だす。

答え：主格 解説：「何とも言えないよい香りがするので、はっとして外を見る」。「する（す）」の主語が「香」で、「が」に置き換えられる主格。直後の「する」はサ変動詞「す」の連体形で、「に」に続く。

Q78. 次の傍線部「の」を識別せよ。

黒き雲の、にはかに出で来て。

答え：主格 解説：「黒い雲が、にわかに出てきて」。「出で来」の主語が「雲」。「が」に置換でき主格。後ろが「雲」を説明し直す同格ではない（述語に係る）。

Q79. 次の傍線部「の」を識別せよ。

衣は、姉のも妹のも、いと清らなり。

答え：いずれも準体格 解説：それぞれ直後が係助詞「も」。下に「衣」を補って「姉の（衣）も妹の（衣）も、たいそう美しい」と読める。どちらも準体格。

Q80. 次の傍線部「の」を識別せよ。

秋風の吹きにし日より。(古今集)

答え：主格 解説：「秋風が吹いた日から」。「吹き」の主語が「秋風」。「が」に置換でき主格。直後「吹きにし」は連体形で「日」を修飾。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

難関大の実戦レベル。複数用法の混在・紛らわしい同格／主格・有名出典で総仕上げ。

Q81. 次の傍線部「の」を識別せよ。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ。（伊勢物語）

答え：主格 解説：「季節を知らない山は富士の山だ。今をいつだと思って、鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろうか」。「降る」の主語が「雪」で、「が」に置き換えられる主格。「か」の結びで「らむ」は連体形。（「富士の嶺」「鹿の子」の「の」は連体修飾格。）

Q82. 次の傍線部「の」を識別せよ。

中将の、いと清げにて。

答え：主格 解説：「中将が、たいそうこざつぱりと美しい様子で」。「清げに」は形容動詞「清げなり」の連用形で、連体形で終わっていないので、下に「中将」を補えない（同格ではない）。「清げなり」の主語が「中将」で、「が」に置き換えられる主格。「の、」と読点があっても同格とは限らない。

Q83. 次の傍線部「の」を識別せよ。

しづ心なく花の散るらむ。（古今集・紀友則）

答え：主格 解説：「落ち着いた心もなく花が散るのだろう」。「散る」の主語が「花」。「が」に置換でき主格。

Q84. 次の傍線部「の」を識別せよ。

年ごろ思ひつる人の、かく心変はりせるを聞きて、泣く泣く文を書く。

答え：主格 解説：「長年慕ってきた人が、このように心変わりしたことを聞いて、泣きながら手紙を書く」。「心変はりせ（心変はりす）」の主語が「人」で、「が」に置き換えられる主格。「せる」の下に補えるのは「人」ではなく「こと」（聞いたのは心変わりしたこと）なので、同格ではない。

Q85. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大納言殿のまゐり給ひて。

答え：主格 解説：「大納言殿が参上なさって」。「まゐり給ふ」の主語が「大納言殿」。「が」に置換でき主格。敬語の主語も「の」で示せる。

Q86. 次の傍線部「の」を識別せよ。

白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。(伊勢物語・東下り)

答え：同格 解説：「白い鳥で、嘴と脚が赤く、鳴ほどの大きさの（鳥）が、水の上で遊びながら魚を食う」。「白き鳥」と後ろの説明が同一物。都鳥の描写。「で」に置換できる同格。

Q87. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人の待つ里。

答え：主格 解説：「人が待つ里」。「待つ」は連体形で「里」を修飾、「人」がその主語。「が」に置換でき主格。

Q88. 次の傍線部「の」を識別せよ。

心のうちに思ふ。

答え：連体修飾格 解説：直後が体言「うち」。「心のうち（心の中）」で修飾関係。連体修飾格。

Q89. 次の傍線部「の」を識別せよ。

月のいとあかきに。

答え：主格 解説：「月がたいそう明るいときに」。「あかき（あかし）」の主語が「月」で、「が」に置き換えられる主格。「の」の直後は副詞「いと」で、その下の「あかき」が形容詞の連体形。「に」に続く。

Q90. 次の傍線部「の」を識別せよ。

人のそしる言の葉。

答え：主格 **解説：**「人が非難する言葉」。「そしる」は連体形で「言の葉（ことば）」を修飾、「人」がその主語。「が」に置換でき主格。

Q91. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いと大きな石**の**、道をふさぎたるを、人々して取りのけさす。

答え：同格 **解説：**「たいそう大きな石で、道をふさいでいる（石）を、人々に命じて取りのけさせる」。「ふさぎたる」の下に「石」を補える。前後が同じ石を指し、「で」に置き換えられる同格。

Q92. 次の傍線部「の」を識別せよ。

鹿の音**の**聞こゆる。

答え：（後の「音の」）主格 **解説：**傍線部は「音の」。「（鹿の）音が聞こえる」。「聞こゆる」の主語が「音」。「が」に置換でき主格。（前の「鹿の」は連体修飾格。）

Q93. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あやしう、**この**翁の歌はこれにはまさりけり。

答え：（傍線部「この」）連体修飾格 **解説：**「この翁」で直後が体言「翁」。指示語＋「の」で修飾関係。連体修飾格。

Q94. 次の傍線部「の」を識別せよ。

いかなれば四条大納言**の**はめでたく、兼久がはわろかるべきぞ。（宇治拾遺物語）

答え：準体格 **解説：**秦兼久が、自分の歌と四条大納言（藤原公任）の歌を比べて言うことば。「どうして四条大納言の（歌）はすばらしく、兼久の（歌）はよくないはずなのか」。直後が係助詞「は」で、下に「歌」を補う準体格。（後ろの「兼久がは」の「が」も、同じく下に「歌」を補う準体格。）

Q95. 次の傍線部「の」を識別せよ。

をりふし**の**移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。（徒然草）

答え：主格 **解説：**「季節が移り変わるこそ、何ごとにつけてもしみじみと趣深い」。「移り変はる」の主語が「をりふし（季節）」で、「が」に置き換えられる主格。「移り変はる」は連体形で、下

に「こと」を補う（体言の代わりをしているのは連体形で、「の」ではないので準体格ではない）。
「こそ」の結びで「あはれなれ」は已然形。

Q96. 次の傍線部「の」を識別せよ。

黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童**の**、をかしげなる出で来て、うち招く。（源氏物語）

答え：同格 **解説：**「黄色い生絹（すずし）の単袴を長めに着こなしている童で、かわいらしい（童）が出て来て、手招きする」。「をかしげなる」の下に「童」を補える。前後が同じ童を指し、「で」に置き換えられる同格。（「生絹の単袴」の「の」は連体修飾格。）

Q97. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あけぼ**の**空。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「空」。「あけぼのの空（明け方の空）」で修飾関係。連体修飾格。

Q98. 次の傍線部「の」を識別せよ。

あまた**の**舟。

答え：連体修飾格 **解説：**直後が体言「舟」。「あまたの舟（たくさんの舟）」で数量＋体言の修飾。連体修飾格。

Q99. 次の傍線部「の」を識別せよ。

大きやかなる童**の**、文持ちたるが来て、「これはあるじ**の**なり」と言ふ。

答え：（前「童の」）同格／（後「あるじの」）準体格 **解説：**前の「童の」は「大柄な童で、手紙を持っている（童）がやって来て」と、「持ちたる」の下に「童」を補える同格。後ろの「あるじの」は、下に「文」を補って「これは主人の（手紙）です」と読む準体格（直後の「なり」は断定の助動詞）。同格と準体格が一文に出る難問。

Q100. 次の傍線部「の」を識別せよ。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もと**の**水にあらず。（方丈記）

答え：連体修飾格 **解説：**傍線部「もとの」。直後が体言「水」。「もとの水（もとの（同じ）水）」で修飾関係。連体修飾格。（冒頭の「河の流れ」の「の」も連体修飾格。）

採点振り返り

おつかれさまでした。間違えた問題は「置き換えテスト」のどこでつまづいたかを確認しましょう。

- **連体修飾格**…直後が**体言**。迷ったら最後に残るのがこれ。
- **主格**…「**が**」に置換でき、「の」の前の語が下の用言（述語）の主語になる（風の吹く夜）。
- **同格**…「**で**」に置換でき、前後が**同じもの**。後ろに同じ体言が省略されている。
- **準体格**…「**～のもの・～のこと**」と訳し、「の」の下に体言を補える（唐の〔なでしこ〕は）。古文では〈体言＋の〉の形で、すぐ後には・も・を・に・と・なりなどが続く。

主格と同格の最終見分け：後ろの句が連体形で終わり、その下に「の」の前と同じ体言を補えるなら**同格**（白き鳥の、嘴と脚と赤き〔鳥〕）。補えないとき、「の」の前の語を主語とする用言が別の体言を修飾している（風の吹く**夜**）・下に「こと」を補う（雨の降るを見る）・「～ば」「～て」などと先へ続く・文がそこで終わる（ふつうは連体止め）なら**主格**。

繰り返し解いて、「の」を見た瞬間に直後の語をスキャンする習慣をつければ、入試本番でも一瞬で見抜けます。

この問題集は無料です。古文の他の識別（「に」「なり」「が」など）のドリルや、文法解説とあわせてご活用ください。

誰でも古典塾 (<https://kotennosenensei.com>) ／ 個別指導塾フィット・中本裕太